

不登校加配教員を中心とした校内別室の利用について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校 2 年生であり、中学校 1 年生の 2 学期から教室に入ることができなくなり欠席が続いた。保護者は、当該生徒の意思を尊重しているものの、仕事面の忙しさなどもあり、当該生徒との関わりや、学校を含めた連携がうまくいっていない状況があった。

具体的な取組

○組織力の向上

不登校対応加配教員を中心として SSW、担任と連携を取ることができた。また、ケース会議を開き、子ども家庭支援センターや関係している保育園など外部機関との連携、今後の方針について確認をすることができた。

○コミュニケーションの機会の設定

校内別室や担任との面談など、人との関わりやコミュニケーションの機会を増やすことで、他者との関わりに感じていた困難さが薄れ、笑顔を見せることが多くなった。学習にも意欲を見せ課題に率先して取り組み、登校日数が増えた。

○校内体制の強化

校内別室に通室している生徒に対して、担当教員だけでなく、学年に関係なく多くの教職員で対応することができた。学習面に不安を抱えている生徒もあり、教職員によるフォローにより教室復帰に向けて行動することができる生徒もいた。



○個々の不登校生徒への支援

不登校対応加配教員を中心として、校内委員会等で不登校生徒への対応について確認をした。連絡の頻度や家庭訪問について、SSWとの連携など、生徒の希望に沿った対応ができた。



成果

不登校対応加配教員が加配されてから 3 年目となり、本校の不登校生徒の割合は 3.8% となった。これは昨年度の 6.06% から 2.26 ポイントの減少である。加配教員により教職員と生徒の交流を多くもつことができたことが要因の一つである。

課題

校内別室利用者は増加傾向にあり、加配教員以外にも指導・支援ができる人が常駐できることが望ましい。

校内別室指導支援員を中心とした不登校支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校の高学年から不登校傾向が見られ、中学校入学後はしばらく登校を続けていたが、中学校 1 年生の 3 学期から集団への不適応を訴えるようになった。現在、校内別室において、高等学校への進学を見据えて自学自習に励んでいる。

具体的な取組

○別室登校での自学自習の取組

毎日 9 時から午前中の時間帯に、別室登校の場で自学自習に励んでいる。配布されたプリントや学習用端末内の個別学習ドリルを活用し、自分のペースで学習を進めている。



○校内別室指導支援員による支援

校内事情や地域に広く顔の利く人材を校内別室指導支援員として配置することで、生徒が安心して登校できるようになるだけでなく、保護者も安心して生徒を学校の別室に送り出すことができています。

○不登校対応加配教員との連携

別室登校を利用する生徒の情報や、別室の教室環境に関する生徒の要望を不登校対応加配教員に伝え、それらの内容を校内で広く情報を共有している。生徒の要望に関しては、可能な限り実現できるよう、支援部会等で提案し、検討を進めている。

○生徒との信頼関係の構築

校内別室指導支援員には学習支援ではなく、生徒の見守りをお願いしているが、生徒の良き相談相手としても活躍されている。

また、別室が生徒の居場所となるよう、教室内の装飾を生徒と共に作成した。

成果

校内別室指導支援員の見守りや気付きにより、生徒が利用しやすい別室教室の環境整備ができた。

同じ支援員が毎日別室に常駐しているため、利用生徒との人間関係が形成され、別室が生徒の心が落ち着く「居場所」としての役割を果たした。

課題

支援員と生徒の間で良好な人間関係を築けているが、校内別室が「学習の場」であることも再確認して、運営を進める。

これからの自分を考える取組について

不登校生徒の状況

対象生徒は、入学して部活動もしていたが、1年生の後半から学校に通えない日が続き、家では夜遅くまでゲームをして朝起きられない生活が続いた。三者面談で、当該生徒から授業についていくのが難しい、個別に学習をしたいという思いが聞けた。不登校対策委員会では別室登校を提案した。また、SSWの登校支援の要請をした。

具体的な取組

○SSWとの連携

長期欠席により、クラスの生徒の目を気にしたり、朝早く起きたりすることが難しかったため、週1回の曜日を決めてSSWに自宅まで迎えに行ってもらった。初めは時間を守らなかったが、待ち合わせ場所を自宅から学校までの道のに変えるなど改善が見られた。

○当該生徒の思いに寄り添う支援

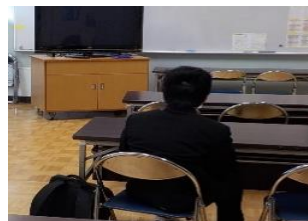
当該生徒は、勉強が分かるようになりたいという思いが強く、当該生徒に最適な環境について不登校対策委員会で話し合いをした。教育支援センターも利用したいという気持ちがあり申し込みをした。家にいる日をつくらず、毎日、学校の別室か、教育支援センターのどちらかに登校するということを本人と支援員、学年教員と話し合った。

○一週間のスケジュール

当該生徒は、支援員と一週間のスケジュールを立てた。別室にミシン、アイロンなど教具を用意し、家庭科の衣服教材を支援員のサポートにより完成させた。技術科教員の空き時間に木工教材を使用し、作品を完成させることができた。毎週同じ時間に指導してもらうことで規則正しい生活を身に付けることにもつながった。

○卒業後の進路に向けた取組

3年生になり、自分が何をしたいのかを支援員、学年教員と話をして卒業後の進路を考えるようになった。自分で考えて基礎学習を計画的に行う同時に、進路に向けた面接練習なども行っている。



成果

当該生徒は、家から出られなかった時期もあったが、基礎から勉強したいという気持ちから、教育支援センターや校内別室に通い卒業後の進路に向けて取り組む姿を見せるようになった。

課題

当該生徒は、自分の感情や意思を表すことが苦手で、相手に気持ちを伝えることが難しいため、これからも支援を継続する。